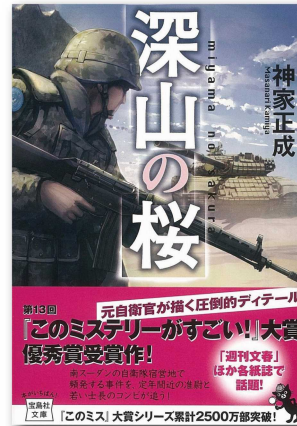


七  
四

ナ  
ナ  
ヨ  
ン

掌  
編

神  
家  
正  
成



前作『深山の桜』と次作『桜と日章』も、宝島社文庫から好評発売中です。同一の世界観の物語で幾人か同じ登場人物が出てきます。

各作品の作中時間と舞台は、『深山の桜』が、2014年2月、アフリカ南スーダンで国際連合平和維持活動中の自衛隊宿営地。『七四』が、2015年3月、静岡県富士学校と東京。『桜と日章』が、2017年4月、千葉県柏市です。

どの作品から読んで楽しめます。よろしければ読んでみてください。

※ この冊子に収録されている掌編は、『七四』ナネヨン読後に、お楽しみください。

バー『イージス』 贖罪の夜



「あらま、やっとあんたも、あたしの実力に気付いたのね。いいわよ特別に教えてあげるわよ。でも携帯ね」カウンターの向こう側に座っている礼——植木礼三郎の甲高い声が、客のいないバー『イージス』に響いた。

桜本潤は、右手に持ったウイスキーグラスを、軽く回してから口元へ運んだ。芳醇な香りが鼻孔に広がる。今日は特別な夜だ。秘蔵のマツカランを開けて、先ほどから二人だけで呑み交わしていた。BGMも流れていない店内は、先ほどまで静かだった。

突然、植木の顔が醜く歪んだ。唇をかみ、眉根を寄せている。手にしたままのグラスが宙をさまよっている。琥珀色の液体と氷が、薄暗い照明の光を浴びて鈍く光った。

桜本は手にしたグラスを、音を立てて置いた。植木が我に返ったように何かに気づき、唾を飲み込んだ。視線を桜本に投げてから、「うーん、それは今回の件？」作ったような声を携帯電話に返す。手にしたウイスキーの水面が揺れている。

話の内容からして電話の相手は、植木の部下の甲斐和美らしい。甲斐は初めて単独捜査を任せられ、富士駐屯地に行っているそうだ。今宵何度か、心配げな愚痴を聞かされた。「やっぱり馬鹿だわ。そんなのあたしに聞くまでもないわよ」調子を取り戻した植木の台詞に、苦笑いが出る。まるで生まれたばかりのひなを心配する親鳥だ。

氷を補充するために冷凍庫を開けた。流れ出る冷気が、あの日の冷たさを、否応なしに思い出させる。アイスペールに氷をいくつか入れ、カウンターに戻す。

「分かってんじゃないの。じゃあ簡単よ。あんたの良心は今どう思ってるの」

——良心という言葉を、何度か発した植木を見た。碎けた調子で話しているが、眼は笑っていない。頬が微かに引きつったのが見えた。

桜本はグラスを口に運んだ。熱い塊が喉を落ちていく。グラスを静かに置き、ため息をついた。よりによって今日、良心の話で植木にさせるとは、甲斐も罪作りだ。一年に一度、『イージス』は、植木のためだけに店を開ける。過去の贖罪と追悼のために——。「それにね。あんたが失敗したら、あたしが責任を取ってあげるから大丈夫。一応、あんたの上官なのよ、あたしは。もっとあたしを信用しなさい」相変わらず軽い口調だが、眼は真剣な光を帯びている。——責任、多くの人は気軽にこの言葉を口にする。しかし、目の前のこの男の口にする責任とは、そんな生やさしいものではない。それこそ、『職務の宣誓』のごとく、「身をもつて責務の完遂に務め」るのだ——こいつは。

「カンボジアのおじさんから手紙が返ってきたのよ。こっちから何十通も出し続けて初めてよ」植木の頬がようやく緩んだ。カウンターのの上には、青と赤の縁取りのエアメーブルが見える。植木は先ほどから、ウイスキーと交互に何度も手紙に目を通しては、ため息と含み笑いを繰り返していた。植木がおじさんと慕う元自衛官も、我々と同じように贖罪のために、残りの人生を生きることを決めたようだ。

——いや、果たして生きることが、贖罪になるのだろうか。かえって罪を塗り重ねている——だけなのではないか。ウイスキーを口に運ぶ。氷の転がる音が心に響く。熱い塊は、心を静めることなく腹に静かに落ちていく。

「そうよ、そういうわけで今夜は祝杯よ。じゃあね」植木が携帯電話を触ると、また『イージス』に静寂が戻ってきた。植木はしばらく黙ってグラスを見つめた後、何かを吹っ切るかのようにウイスキーを一挙に喉に流し込んで、難しい顔でため息をついた。

「祝杯、なのか……」植木のグラスにマツカランを継ぎ足す。植木は黙ったままだ。自分のグラスにも注ぎ、氷を一つ入れてかきまぜる。悲しげな音が、二人の間に響く。

「確か……五年か」桜本の問い掛けに、植木は唇をかんでうなずいた。

「そろそろ……いいんじゃないのか」植木は寂しげに、首を横に振った。

あの事件は、植木の人生から無慈悲にも大切なものを奪った。打ちのめされ、暗闇に投げ捨てられた植木は、言葉遣いを始め、何かから決別することく生き方を変えた。

「……あの娘、個人の判断と組織の判断のことを、聞いてきたわ」植木は目を閉じた。

桜本はため息をつき、同じように目を閉じる。個人の判断より、組織の判断を優先して、目の前の男は永遠に消せない咎を背負った。よりによってその贖罪の日に、そんなことを部下に聞かれるとは……。桜本は再度、大きく息を吐いた。

「あの娘、似てんのよね……」悲しげな声が、植木の口からこぼれる。

神様は罪作りだ——桜本はそう呟きかけ、マツカランを一気におおった。



## 二十七年前の匍匐前進

「おらあ、お前ら、腰を落とせつ」助教の罵声が、眼下のグラウンドから聞こえてくる。柳元秀は制服姿で、冷たさを増してきた早朝の風を、全身で感じながら立っていた。グラウンドでは完全装備の戦闘服装の自衛隊生徒第五十八期生の後輩たちが、木銃を右手に持ち、両足のもげたウサギのような第二匍匐前進を、必死の形相でしている。

富士山の裾野にある富士駐屯地の、秋の深まりは早い。富士学校、機甲教育部、機甲生徒隊に入校してきた生徒たちの受ける洗礼——深夜の非常呼集と終わらないハイポット。柳たち三十一期生の時は、残雪残る四月だった。

二十七年も前のことだ。柳は緩やかに息を吐いた。多くのことが変わった。母校の少年工科学校は高等工科学校へと名称が変わり、オリブドラブ単色の作業服がまともな迷彩服に、半長靴は機性能が高まった戦闘靴に、テツパチは六六式鉄帽から八八式鉄帽に、六四式7・62ミリ小銃は八九式5・56ミリ小銃に、六一式戦車は全車退役し、一〇式戦車の配備が進んでいる。変わらないのは、国防に懸ける幼い気持ちを抱いて、グラウンドを這い回る若き自衛官の姿だけだ。胸が疼き、柳は制服の胸元に手をやった。「お前がへたつてどうするっ、学生長、だろっ」助教の叱責は、中央で遅れがちになっている生徒に向かっている。その生徒は木銃ではなく、橙色の隊旗を持っていた。

風に揺れる隊旗には、機甲科の職種色である橙色の布地に、「機甲生徒隊」と書いてあり、百獣の王の若獅子と戦車の起動輪の絵が描いてある。

最後の気力を振り絞り、多くのものが詰まった隊旗を、必死に握り締める学生長の姿が、二十七年前の学生長——坂本孝浩の顔と重なる。思わず苦笑いが出た。

「第五匍匐！」ようやく最終段階だ。雪のないグラウンドに全員寝そべり、死にかけの芋虫のように少しずつ這っている。隊旗を巻いて手に持った学生長が、遅れを取り戻そうと、必死に先に出ようともがいている。負けず嫌いなのだろう。

——寝てなんかいねえよ。唐突に坂本の口癖が思い浮かんだ。十代の後半の青春の時、ほとんどの夜を、パディであった坂本と過ごした。眠れぬ夜、あいつに、「おい、お前、寝てんのか」と聞くと、必ず同じ答えが返ってきた。負けず嫌いなのか何か知らないが、あいつは寝ていても、寝ぼけ眼で、同じ言葉を返してきた。最後に聞いたのはいつだったか——柳は記憶を呼び覚まそうと目を閉じた。

あの時と同じ風が、頬を揺らす。風も大地も変わらない。変わるのは常に人なのだ。多くの友に想いを馳せる。俺は変わっていないのか——自問の声を口ずさむ。

「突撃っ！」最後の号令に目を開けた。続いてわけの分からない叫び声が、早朝の須走の町に響く。あの時と違い、雪のない斜面を、若き自衛官たちは、木銃を手にして駆け上っていく。柳は、風にはためく橙色の隊旗を見つめた。何期にもわたり、修繕しながら伝統を受け継ぎ、使われてきた隊旗だ。多くの機甲生徒の涙と汗を、吸ってきた。

——いや時には、血も吸ったのだった。胸に湧き上がる熱い想いを、冷徹な意志で押さえつけようとするが、今は亡き友の姿が、とめどなく脳裏に浮かんでくる。

叫び声とともに最後の力を振り絞り、斜面を登り切った生徒たちが、前屈みになり、全身で呼吸をしている。若々しい息吹の音が、ここまで聞こえてくるようだ。皆死んだような顔をしているが、目だけは野性の若獅子のように輝いている。

柳は制服の内ポケットから、昨日届いた手紙を取り出しながら、彼らを迎えるために正門の方向に歩き始めた。富士駐屯地の向こうには、慣れ親しんだ富士山が、朝の陽光を浴びて輝いている。山も光も風も、若き自衛官たちを祝福していた。

正門を抜けると、小さな芝生のグラウンドを囲んで佇む、桜の木々が見えた。桜紅葉の下に、あの日の七四式戦車が見える。あの日見た桜吹雪が、一瞬、目に浮かんだ。

「苦しかったら富士を見よ、悲しかったら富士を見よ」陸上自衛隊生徒の合い言葉だ。続く言葉は——嬉しかったら富士を見よ。

若き自衛官たちの栄えある帰還を待ちながら、柳は富士を見た。

二十七年前と変わらず、富士は雄大な姿で佇んでいる。

緩やかに息を吐き、右手に持った封筒の懐かしい文字に、視線を落とす。右手にはめた古びた腕時計が、朝日を反射した。変わらぬものが、ここにもあった。

あいつも、結局は変わっていなかった。口の端が思わず上がる。封筒の左上の消印には、「柏」の文字が、朝日を浴びて輝いて見えた。



また会う日まで

「シスターは、結婚しないの？」

唐突な質問に東桜月は、口に含んでいたホットミルクを噴き出しそうになった。慌てて飲み込んだホットミルクの熱さにむせながら、東は胸を何度か叩いた。

「ちよ……寛太、いきなり」

卒園式でふだんよりおめかししている赤川寛太は、むせている東をテーブルの向こう側から不思議そうに見上げてくる。大人用の椅子に座っているので上半身はほとんど見えない。慌ただしい行事が無事に終わり、母親が事務手続きをしている間、東は寛太とお別れのホットミルクを飲んでいた。

「だって、シスターだって好きな人はいるんでしょ」

寛太の素朴な疑問に対して、東は目をくるりと回した。カトリックの修道女が結婚をしないことを、どう説明すればいいものか――。

「あたしはね、神さんと結婚してんの」

東の答えに、ふうんと呆れたように鼻を鳴らすと寛太は、ホットミルクに軽く息を吹きかけ、両手で大切そうに口にカップを運んだ。寛太の生意気ながらもあどけない仕草とも、もうお別れかと思うと、東の胸には切なさが急激に込み上げた。

「寛太は、香織ちゃんと離れ離れになって、さみしいしょ」

「そんなことないや」寛太は口を尖らせる。

あの事件から一年、父親を失った寛太は、住み慣れた赤堤から引っ越すことになった。母親と娘は、事件後は口数も少なくなり、やつれていたが、最近、時折笑顔が見えるようになっていた。

「寂しかったら、いつでも遊びにおいで」

東の優しい声に寛太は下を向いた。

「……寂しくなんか、ないや。僕がお母さんとお姉ちゃんを護らないといけないから」寛太の言葉にさらに胸が詰まる。神様は残酷だ。何故、このような幼き者にまで試練を与えるのか――。アフリカの南スーダンで別れてきた子供たちの顔が、寛太に重なる。

「……それに、和美姉ちゃんと、孝浩おじさんと約束したんだ。強くなるって」

甲斐も坂本も、あれから暇を見つけては寛太に会いに来てくれた。甲斐は両手一杯のお菓子と、坂本は男の子向けの玩具を持って。娘しかいない坂本は、男のおもちやをよく分かん、と言いなながらも、息子ができたようだと喜んでいて。

「あらら、礼さんは要らないのかい」

「あの人――変だもん」

寛太に掛かつては植木も形無しだ。思わず口が綻びる。

「ねえ、いつになったらこの腕時計を、着けられるようになるかな？」

いつの間にか胸元のポケットから、あの腕時計を取り出した寛太が、顔を上げて聞いてきた。桜の五人の腕時計——寛太は父親の形見を肌身離さずいつも持っている。まだ早いからと、腕にはめることは許されていないようだ。

「そりやあ、好い漢おとこになつたらしよ」

「いい男って、どんな人？」

「星座の美しい話ができる人しよ」即答した東の顔を、寛太は怪訝な顔で見上げてきた。慌てて言葉を繋ぐ。「あ……いや……礼れいさんみたいな人よ」

「シスター、あんな変な人が好きなの」

「いや、いや——違う。間違い」即座に否定する。いったい何を言っているのだ、私は。動揺した東の耳に、寛太の母親の呼ぶ声が聞こえてきた。

何度も何度もお辞儀をして、寛太の母親は教会を後にする。手を繋ぎながら寛太は、時々思い出したように振り返って、小さな手を一生懸命振ってくる。

段々と母親と寛太が小さくなる。春の心地良い風が、頬を揺らした。

東は、両手を強く胸元で握り締め、祈りを込めて、そっと聖歌を口ずさんだ。

神ともにもいまして　ゆく道を護り　あめ天の御みかて糧もて　力を与えませ

また会う日まで　また会う日まで　神の護り　な汝が身を離れざれ

神家正成（かみや まさなり）

※本書の感想、著者への励ましなどは、下記ウェブサイトやTwitter、  
Facebook、noteまでお気軽にどうぞ。

<https://kamiya-masanari.com/>

[https://twitter.com/Kamiya\\_Masanari](https://twitter.com/Kamiya_Masanari)

<https://www.facebook.com/Kamiya.Masanari>

[https://note.mu/kamiya\\_masanari](https://note.mu/kamiya_masanari)

ナナヨン しょうへん  
七四 掌編

2016年10月 8日 第1刷発行

2017年 9月20日 増補版 第1刷発行

著 者：神家正成

発行人：神家正成

発行所：株式会社神家正成

組 版：株式会社神家正成

印刷・製本：神家正成株式会社

本書の無断転載・複製はご自由にどうぞ。喜びます。

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

© Kamiya Masanari 2017 Printed in Japan

First published 2016 by Kamiya-Masanari Co., Ltd.

ISBN 978-4-1115-7609-8